敷居を跨ぐ時に軽く躓いて、何故か少しムカついた。

表面に染み付いている。 ている。それも鉄の扉と同じぐらい古びたもので、よく見ると赤い錆びが痣のように鉄の 三十年以上の歴史を持つ鉄の扉の下で、地面から少し膨らむ程度のものが一本横たわっ

さんの倉庫だ。木工が大の趣味で、時折何か家具を作って家族に贈っていた。 の前には木の棚が置いてあり、その中にのこぎりやハンマなどが置いてある。それがお爺 鉄門から入って、眼前にあるのは百メートル弱の細長い巷である。巷の果てにある倉庫

びた金属の表面が覗かれる。 がりの中に緑の三輪車が一台置いてある。かなり年を取ったもので漆が剥げて所々赤くさ **倉庫の門が向いている方向にある集合住宅の一階の右手が、お爺さんの家だ。階段の暗** 

南方の人とは思えないぐらい広い背中だ。 入って、お婆さんの写真の前で線香を三本添えて拝んだ。今度は手前の部屋に這入った。 する。静かすぎて寂しくさえ感じる。リビングの側に寝室が二つ並んでいる。奥の部屋に 爺さんは入口に背を向けて、古びた藤の椅子に座ったまま一心不乱に何かをやっている。 鍵を取り出して扉を開けた。部屋そのものは、前回来た時と何一つ変わっていない気が

「お爺さん」。

返事がない。

さんの肩を叩きながらもう一回大声で呼んだ。 九十三歳にしてはなかなか健康なのだが、耳だけがかなり遠くなっていた。そこでお爺

「お爺さん!」

「あ」、お爺さんは一瞬驚いて、すぐ笑顔になった。 「来たのか。

「お爺さん、何しているの?」

できるだけ声を高めてお爺さんと会話した。

「はは、凧じゃ、凧。これは高く飛ぶぞ。」

お爺さんの手には竜の形をした巨大な凧が掴んである。

「今日の午後これを試すんじゃ。こりゃ高く飛ぶぞ。.

「試すって、また広場に行くの?」

そうじゃ。やつら、驚くだろうな。ハハハハハ。」

やつら、というのは、 お爺さんの凧友達だ。お爺さんは二十年程前に凧作りにハマって

以来、殆ど毎日広場へ通って凧揚げをしていた。そのうちに何人かの同好とも友たちにな ったらしい

「それはいいけど、三輪車を乗るのそろそろよしなよ。」

「大丈夫じゃ。ちょうど運動にもなるしな。」

「また転んだらどうするのよ。」

が直接地面に打って大出血になった。救急台の上に寝ているお爺さんの顔が一瞬頭をよぎ った。不思議なことに今は傷跡一つ残っていない。 お爺さんは一ケ月前に三輪車を乗って大門をくぐる時に敷居の上で一度転んだ。後頭部

お爺さんは一瞬寂しそうな表情をして、またすぐ笑い出した。

か?」 「そうじゃな。これも我が孫のためか。ハハハハ。そういえば、 お前はまた日本に行くの

う?十月にまた熊本に行く予定だったけど、コロナでね。 「うん、今度も熊本。 交換留学の時と同じところ。ほら、 くまモンの写真、 送ったでしょ

らしいが、日本は大丈夫か?」 「そっか、お前も立派になったな、 ハハハハハ。ところが外国は今コロナていうのが大変

「ま、未だ行ってないから分からないけど、気をつければ大丈夫だよ。

お爺さんは軽くうなずいた。そして言った。

「頑張れよ。」

「うん、頑張る。」

覚えのある顔だ。 お爺さんの家を出た時に、隣に住む人に声かけられた。 名前は分からないけどどこか見

「おお、お爺さん見に来たのか?」

「はい、お爺さんはまだ凧を作っていますよ。

「え?凧を作っている?だって…」

ず涙を流した。 を振り返った。 その人の聲は強風のように、私の脳裏に籠っていた霧を吹き飛ばした。お爺さんの家 部屋の静けさがだんだん心に染み込んできた。朝の露が零すように、思わ